丸本の中の老人達

森　ほのほ

マアテルリンクの、たしか"Noture"とかいつた本の中に、「物は自然に還ると、そこに美が現はれてくる」といふやうなことが言つてあつたのをおぼえてゐるが、雨風のために崩れかけた土塀や、傾いた軒端などに新しい豪壯な建築物などよりも反つて畫趣なり詩趣なりをおぼえるもので、石燈籠の苔も十年とかものの譬へにもいふやうに、總べては「時」の洗禮を經なければならないやうである。人間もその人獨自の味とか、風格とかいふものは、とても若い人には求め難いことで、やつぱり浮世の雨風にいためられ、苦しめられ來ないでは、本當の味は附かないし、底光りは現はれて來ないものと見える。

私は、玉手のセリフではないが「いかなる過去の因緣」か、震災のために東都からこの京の地へ移り住むことになつたが、この地へ來て始めて、全く角のとれた、さながら珠のやうな、圓滿具足の老人の二三にまみえることが出來た。佛家では生老病死を四苦といふが、さういふ老人達と知るに及んで、私は、年をとるといふ事もあながちさう惡いことではないと思ふやうになつた。自分もあの人達の年配になつたら、あの人達のやうな圓成の境に入りたいものだと冀ふやうなわれながら殊勝な氣持になつたのであつた。

世阿彌は能を老體、女體、軍體（勢へる人體）の三體に分けて、この三つは物眞似の人體也といつてゐるが、中でも老體の至難なものであるのは云ふまでもなく、所謂三老女物の如きは秘中の秘として今に傳へられてゐるこれらの老體（老女物、尉物）に用ゐる面の中に尉面の一群がある。能面の中で私が最も興味を持つのがこの尉面であつて、それには白式尉（翁）を始めとして小尉（小牛尉）、三光尉、笑尉、朝倉尉、皺尉、舞尉、石王尉、などの種類があるが、いづれにしても興味を與へるとこ

ろのものは、その樣々の皺—すなはち線の素描的な面白さに外ならない。これらの能面を掛ける役々は、多く類型的なものであるが、それでも「國栖」の翁や「戀重荷」(或は「綾の鼓」)の老僕の如き特殊な、人間味のあるものもあるにはある。それにしても、丸本物に現はれて來る老人の如き複雜な心理を持つものとは、とてもとても比べものになりはしない。それはもともと本質的な相違がそこにあるのだから致し方もないことなのであるが…。

私はさきに京の地に、悟入解脫の域に入つたかの如き圓滿具足の老人の二三を見たことを述べたが、それらの老人は私に能の尉面を聯想させると同時に、丸本物の老人を思ひ出させずには置かなかつた。どころではない、それらの老人はたゞちに丸本物中の人物そのまゝとさへ思へたのであつた。それにつけても懷しいは丸本の中の老人達である。彼等は百年後—二百年後の今日もなほ多くの丸本の中に、いき生きと躍動を見せてゐるのである

その中でも、私は先づ第一に「ひらがな盛衰記」の髮鑠たる老船頭權四郎を思ひ浮かべる—。彼は彼の海の生活をそのまゝ浮世の荒い波風にも揉まれもまれて來たに違ひないのだが、といつて彼は決して悟りすまし、行ひすました男ではない。まだ人並みの慾ッ氣もあるだらう執着もあるだらう、まことに平々凡々のたゞのおやぢである。人間的な餘りに人間的な老人である。そのあけすけな、はだか丸出シのところがほゝ笑ましく好もしいのである。

思はぬ大津の騷動で取り違へた幼子がまさか木曾殿の若君と知るよしもないが、人の子とあれば我が子以上に心をつけ、「兎の毛で突いた程も怪我させず、虫腹一度痛ませず」娘の乳で育で上げ、今では本當のおのが孫の槌松同然にいつくしむで、全く白地の別を知らない權四郎、それだけに圖らずもお筆の顏を見れば、もう我が孫も同じ樣にすく〳〵と生ひ育つて、無事息災で戻つて來たものとのみ思ひ込んで、「能う連れて來て下さつた忝い〳〵、わるさよ我が內を忘れたか、なぜはいらぬ……連の衆が跡から連れてお出でなさるゝか……」とたゞ有頂天になつてしまふ權四郎、あまりの無邪氣さ、お人よさに私は暗涙を禁じ得ない。かういふ風であるから空しい悅びの後の悲しみは一層大きい。娘およしに向つては「泣けば槌松が戻るか、世まひごといや二タ度坊主めに逢はれるか」とたしなめるが、その尾についてお筆がお爲ごかしなことを云ひ出すと、今まで抑へに抑へてゐた悲しみは憤りと一變し、「女子默れ、何のつらの皮でが

や〳〵おとがひ叩く耻を知れやい」と大喝し、「なんぢや思ひ諦めて若君を戻して下され、町人でこそあれ孫が敵首にして戻さうぞ」と理も非も無くいきり立つ。が松右衛門實は樋口ノ次郎から「血を分けぬ子が子となつて、忠義を立てし」は天の冥慮に叶ふところと説かれ、武士の道といふものがどうやら腑に落ちると、すぐにはたと横手を打つて、「恨みも殘らぬ悔みもせぬ泣きもせぬ、娘精出して早うまた槌松を產んで見せをれ」と諦めと共に輕いじようだんも口にのぼる。或は孫の形見の笈摺が目にとまると、「どこへなりととつとと捨てゝしまへ」と深い考も無く言つてのける。松右衛門からせめて佛前へ直し回向してやつてくれと言はれると、「侍の親に成つて未練なと人が笑ひはせまいか」とためらひ、「何の誰が笑ひましよ」と言はれて始めて「有りやうはさつきにからさうしたかつた」と笈を胸に抱き締めてよゝと咽び泣く何處までも憎めない、愚直な、然し佛のやうな權四郎である。

この作は文耕堂が晩年に近いもので、彼の最初の作といはれるものからは二十五六年の歲月が經つてゐる。恐らく年も五十を越え、筆にも愈々油が乘つて來た時代には違ひないが、この權四郎は全く能く描けてゐる。殊にお筆との間髪を入れぬ對話のやりとりは羨しい筆力である。シテ役の松右衛門實は樋口ノ次郎は作者の意のまゝに動かされてゐるけれども、權四郎は作者を離れて本當に生きてゐる—。（私は權四郎老人について少し語りすぎたやうである。殘りの人々はほんの紹介の程度に、筆を急ぐこととしよう。）

私が次に指を折るのは、あの「夏祭」に登場する「撥鬢糟毛の親仁」、「人の脈がるぶらぶらも、年が意見で直つたか」、「今はたゞ出入りの數をつまぐつた珠數三味」の釣船の三ぶである。世間の人が—現に舅の親仁さへが—脈がる牢拂ひの男を、たゞお互に虫が好くだけで、さして深い間柄でもない男を、わざわざ大阪から着替一枚に小遣ひ錢まで添えて、「ひよこ〳〵」と迎ひに出て來る「男仲間のはね出され」が祭をしほにねだれ込むと、珠數を切つて敢然と昔の釣船に立ち還る。時と場合では白刄と白刄の間へ飛び込む全く小氣味のいい親仁である。折にふれて女房がつひちよつと惚れ直すのも無理ではない。年の行かぬ舞妓さんでも時の拍子で閻惚れせぬものでもなささうである。老優歌六の三ぶはあの人の、身に附いた洒脫さと、巧まないユーモアが時々顏を覗かすのが面白かつた。

三河屋の義平次といふ―これは中車のが目に殘つてゐるが―あの惡魔の燻製のやうな因業親仁も、糸鬢青額の團七九郎兵衛に派手なシバキを打たせる一人物といふ看方からは憎めないが、こゝではもともと建ヲ前が違ふから、わざと言ひ及ばないことにする。

出雲が描いた「菅原」の白大夫と、半二が描いた「歌祭文」の久作とは同じ百姓で、同じ樣に瓢逸なところがある。四郎九郎改め白大夫―「伊勢の御師か何ぞのやうに」と自分自身云つてゐる白大夫は、大きな重箱の内へ少しばかりの餅を盛つて、その餅の上へ茶筅で酒塩を打つたのをすまし込んで配る。久作はまたしきりに洒落をいふ―「この藁苞の芋は鰻になる……われは又お内儀になる」とか「橙の數は爭はれぬ」とか「あすが日死なうと火葬はやめにして貰ひませう、丈夫に見えてももう古家、屋根も根太も、一ッ時に割普請」（炙の件）だの「三々九どうは言はぬが花嫁」、「目出度い春をまつ竹梅」などと、こんな風に洒落が口をついて出る。勿論細かく言へばおのづから二老人の風格も違ふけれど、それは兎も角も、半二の久作は出雲の白大夫に暗示を得たところが無かつたか？

大近松が六十六歳の名作「壽の門松」には一徹ではあるが人道主義の老武士楠田治部右衛門と、町人道と人間愛に板挟みとなつて惱む山崎淨閑老人がある。同じく情に生きながらもそれぞれ違つた性格が對立的に描かれてゐる罪科の身に降りかゝつてゐる我が子を逃がすところが同じ作者が五十九歳の時の「冥途の飛脚」の孫右衛門に似通つてゐる。出雲が描いた「双蝶々」の老母が「せめて親への孝行に遁れるだけは遁れてくれ、生きられるだけは生きてたも」と人殺しの長五郎を逃がしてやるのも竹本三郎兵衛の「酒屋」の半兵衛が「半七が命一日なりとも延ばしたいと人殺しの科を身に引受け」て縄目にかかるのも、同じ愛、同じ情から湧き出てゐる。なほ「酒屋」に於ける一徹な宗岸老人と、追從ぎらひな偏屈人の半兵衛との對立は、前の「壽の門松」に於ける淨閑と治部右衛門のそれを聯想させる。恐らくは作者三郎兵衛は大近松に負うところがあつたのであらう。たゞこれ以後の作になると、偏俠な武士氣質や世間への義理人情の爲に人間愛が人間味が犧牲にされてゐる。さうした惱みに在る老人や、さうした悲劇を醸す老人達を私はもう好むことが出來ない。